

Using Tools to Enhance Reflective Thinking in English Teaching Methodology Courses: Focusing on Reflective Group Discussion

英語科教育法の授業でどのようにツールを活用してリフレクションを深めるか—グループ・ディスカッションに焦点を当てて—

Yamaguchi, Takane (Shumei U.)
Morimoto, Shun (Tamagawa U.)
Osada, Eri (Kokugakuin U.)
Osaki, Satsuki (Soka U.)
Yoneda, Sakiko (Tamagawa U.)

英語教職課程において、ポートフォリオなどのツールを用いて学生にリフレクションを育成する取り組みが行われている。本シンポジウム登壇者を含む教師教育実践者は、2023 年に全国の大学の英語教職課程担当者を対象とした質問紙調査を行い、大学における初等・中等教員養成課程の英語科教育法の担当者が、授業時にリフレクションの指導をどのように行っているかを明らかにした。2024 年には全国調査回答者の中から協力を依頼し、質問紙追調査と聞き取り調査を行った。その目的は、英語科教育法における学生中心の授業がどのような目的や方法で行われているか、様々なツール（グループ・ディスカッション、ポートフォリオ、記述、省察モデルなど）を用いて省察させる場合に、どのような内容で、どのような活動と結びつけて行わせているかについて事例を分析することであった。その結果、学生中心の授業が主として模擬授業後の省察的グループ・ディスカッションとして取り入れられている事例が多いことが判った（筆者ら, in press）。本シンポジウムでは、筆頭登壇者による調査概要の報告と他の登壇者による省察的グループ・ディスカッションやそれに関連する指導実践の発表、フロアとの意見交換を実施する予定である。第3 登壇者は、初等英語科教育法にて 40 人を超える受講生を担当している中で、ビデオ撮影した模擬授業を見ながらグループで振り返ることでのグループ・ディスカッションの内容とそれが与える各々の省察への影響を報告する。第4 登壇者は、中等の英語教員免許状を取得希望する学生が参加する模擬授業後のグループ・ディスカッションでの J-POSTL と ALACT モデルを用いた振り返りを促す方法を中心に報告する。第2・第5 登壇者は、教職実践演習にて学生がどのようにグループ・ディスカッションを行い、それがどのようにリフレクティブ・エッセイの記述内容に影響したのかを報告する。

Aug. 28/ 15:40-17:10/ Room 812

English Language Education for Citizenship Development: Characteristics and Challenges in Primary and Secondary Schools in Japan

小・中・高等学校におけるシティズンシップ育成を取り入れた英語教育の特徴と課題

Kurihara, Fumiko (Chuo U.)
Kiyota, Yoichi (Meisei U.)
Nakayama, Natsue (Bunkyo U.)

本シンポジウムでは、日本の英語教育の文脈におけるシティズンシップ育成の方向性について検討する。筆者らは、昨年 12 月に、シティズンシップ育成の観点を授業やカリキュラムに取り入れている英語科の教員 5 名（小学校教員 2 名、中学校教員 1 名、高等学校教員 2 名）による実践報告と意見交換会を実施した。実践報告において、小学校の教員からは、ユニセフ動画を活用した活動や、児童が主体的に文献やインターネットを活用して人口データを読み解く活動について報告があった。中学校の教員からは、シティズンシップ育成のためには、本物の議論の場、自己決定の機会、社会とのつながりが求められるという認識のもと、海外の学校と交流したり、教科書の題材を多様な視点から分析させたり、生徒自身にスピーチの評価ルーブリックを作成させたりする活動について報告があった。高校の教員 2 名は、勤務校がユネスコスクールのキャンディデート校（日本の加盟校・キャンディデート校は 2025 年 2 月時点で 1,173 校）であり、海外の学校との活発な交流活動、絵本を使った取り組み、平和学習プロジェクトなど多岐にわたる活動報告があった。意見交換会の後、5 名の教員を対象にアンケートを実施し、シティズンシップ育成を取り入れた英語教育実践の意義や、考慮するべき点、教科書の内容との関連付けや、評価などについて質問をした。本シンポジウムでは、各教員による実践報告とアンケート結果をもとに、シティズンシップ育成の要素を整理し、グローバル・民主的・デジタル・シティズンシップなどの観点から考察する。これらの結果を踏まえ、今後の英語教育におけるシティズンシップ育成の効果的な実践方法について議論する。

A New Era of English Education Opened by English as a Lingua Franca (ELF)—Teacher Development and Classroom Practices

ELF（共通語としての英語）が拓く新時代の英語教育—教員育成と教育実践

Suzuki, Ayako (Tamagawa U.)

Fujiwara, Yasuhiro (Meijo U.)

Konakahara, Mayu (Kanda U. of International Studies)

Takino, Miyuki (Tokyo U.)

本シンポジウムでは、共通語としての英語（English as a Lingua Franca: ELF）の視点が、学生が将来にわたって多様な文化を持つ相手と的確に伝え合う英語力を育むために不可欠であることを論じ、その実現に向けて、英語教員自身が ELF の発想を理解し、実践に活かす重要性と具体的な実践例を示す。英語が世界中で広く使用され、非母語話者の割合が急増している現代社会を背景に、日本の英語教育は「生徒が英語を使って意見を発信し、他者とコミュニケーションを行う」ことを目標として掲げている（文部科学省「高等学校学習指導要領（外国語編 英語編）」2018）。しかし、日本では依然としてネイティブスピーカー中心の教育モデルが主流であり、多様な英語使用を前提とした柔軟なコミュニケーション能力の育成に課題が多い。本シンポジウムの前半では、「英語教師力の強化における ELF の必要性」をテーマに、まず英語教員が ELF の概念を理解する重要性とその影響を、留学経験のある教員志望者のインタビューに基づき論じる（鈴木）。次に、国際英語（WE/ELF/GE）の視点からの英語教員養成の実践例を紹介する（藤原）。後半では、「新時代を生きる学生にとっての ELF」をテーマに、ELF についての専門科目を通した学び（ELF（GE）-informed instruction）が学生の言語態度に与える長期的効果について議論する（小中原）。最後に、大学教育における ELF を意識したタスクベースの英語指導の実践例を報告し、教育現場での ELF 発想の指導方法を具体的に提案する（瀧野）。本シンポジウムは、ELF 発想が日本の英語教育に拓く可能性と、英語教育に ELF 指向を取り入れる際の課題や具体的な事例を紹介することで、英語教育の新たな方向性を示唆することを目指す。